

あいだのすみっこ不定期漫遊連載 第141回

「あいだ」の哲学に向けてくもの巣の「穴」をねらう：人文知の再定義と復権のために 藝術行為再考に向けた、暫定的な覚え書き(中)

稲賀 繁美

(いなが しげみ/国際日本文化研究センター、総合研究大学院大学教授、放送大学客員教授)

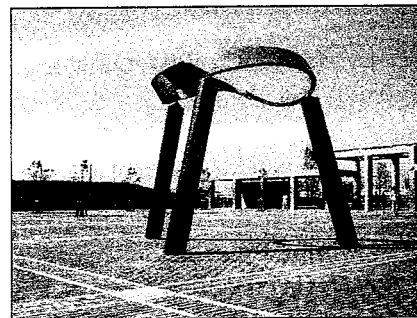
5. 「困難」としての「レンマ学」とその射程

ここまでの紙面を費やして、ようやく「同一律」「矛盾律」「排中律」にまつわる常識の初歩的解体作業を終えた。別途の議論の可能性や、より精確な数学的立論は、小泉義之『ドゥルーズの霊性』に纏められた諸論考ほかに委ねたい*31。

中沢新一は『レンマ学』の「付録3」でこれら3つの「律」の解除を「中論」に帰して要約する(中沢:412)。同一性=自性の皆たるmonadeと、漂流する揺蕩のnomadeとの相補性はフランスの哲学者、ジル・ドゥルーズも好んだ地口だが、これは法蔵の「自位動ぜずして而も常に去来す」を彷彿とさせる(中沢:402)。白南準=ナムジュン・パイクのStationary nomad「定住的遊牧」はこの『華嚴五教章』に由来するのでは?と筆者は密に睨んでいるのだが、議論がここまでくれば、輪廻転生・永劫回帰を巡る議論も、再び振り出しへと再帰する——今や、かつての常識的理解とは異なった相貌を呈して。ここで「同一物」は異貌を呈して顕現する定めにある、あたかも「抑圧されたもの」の

再帰と同様に。そこにふたつほど補っておこう。まず「差異」そして「霊性」である。

まず、「同一」が迷妄となれば、「差異」とは何かも、あらためて問われることになる。ドゥルーズの高名な著作の題名『差異と反復』も、もはや通常の意味では解釈できなくなる。なぜなら「同一」のみならず「差異」もまた、今や逆説的な再定義を要請するのだから。そもそもヘーゲルが『大論理学』で説いたように(中沢:300)「絶対的差異」は自らが「排除する自同性」であるがゆえに、定義からして自らを排除する性質をもつ。かくして永劫回帰の織り成す「同一即差異」の裏側には、メビウスの帯■1よろしく「同一性の排除」が列をなして貼りついており、それらは「差異」を共有する限りで「同一性」を帯びる。一枚の帯を途中でひと捻りして結びつけた輪がメビウスの帯だが、その表と裏とは、互いが互いの根拠を掘り崩す振る舞いによって、互いに支え合う。「同一」と「差異」もこの表裏を、虚実さながらに行き来する変幻自在の「反復」のうえに、己が依存性



■1 関根伸夫 《永久の環》 千葉工業大学モニュメント 表裏の縁としての、同一性の永劫回帰：メビウスの帯の立体造形(鉄、ステンレス、420*400*530)

の実相を現わす。

この文脈で小泉義之は奇しくも「霊性」という言葉を用いる。瞬時に生成しては再帰を繰り返す粒子/波動即ち光を、ジル・ドゥルーズもまた「霊」と名付けていた。それを「霊性」と呼ぶ根拠はどこにあるのか。一見唐突にも見える「名付け」だが、本稿のこれまでの議論を踏まえれば、いまやこれも腑に落ちよう。この「霊」はもはや常識の「同一」律には収まらず、「Aかつ非A」あるいは「Aでも非Aでもない」という命題の跳梁を許すような多元世界の住人に与えられた銘辞だった。霊とは遍在するが、そこだと指し示された場所には見出すことができず、それが存在しないとされる場所に出現する「なにものか」なのだから。そして、ここに現れる「多元的世界」とはテトラ・レンマの4つの律の裡に成り立つのだから。南方熊楠が「不思議」と呼んだのも、他ならぬこの事態だったはずだ。

こうして、古典的な論理学では自明だったはずの基礎概念が、互いに自己を否定する対立概念によって、はじめて自らの有効性を保証され、持ちつ持たれつの往還運動を見せ始める。相互に「差異」が

あるからこそ、それらは「差異」という特性を共有し、その限りで同等となる。差異と同一とが互いの尾を噛む二匹の蛇と化すこの霊媒空間では、どのような音楽を作曲したにせよ、それらはすでに登記済みの楽曲の「想起か盗作」になる(小泉:139)。これは一種のdilemma(すなわち「対のレンマ」)だが、それを巧みに図示したものが「対極図」となる。陰と陽とが違いに巴を描き永劫の円環運動をする、あの図である(中沢:315)。

この陰と陽との「追い駆けっこ」(中沢:317)では、「常に他者」でしかない「自分」が表裏となって現れては消え、永劫に纏綿し、点滅する。無と存在も、相補って無限螺旋をなす。ここでひとつ興味深い現象が発生する。それは「同一」が「ゼロ」と査定されるという機構である。これはアメフラシに同一の刺激を与え続けても、それが危険でないと「学習」するや無反応になると同類の仕組みだろう(中沢:357-358;369-370)。逆に、生存に危機を及ぼす「異物」はそれとして認知されなければ、生体は危機に瀕する。これは免疫系の基本的な他者認識の図式である。即ち、免疫系において「自己同一性」は欠如として、ゼロ記号に還元される*32。なぜなら、「ある」と認識されたものは、抗原抗体反応を惹起させる抗原として攻撃対象となるからだ。したがって免疫系にあっては、「ゼロ」は無意味ではなく、逆に生体の存在の基底をなしている。

思えば同一と看做されるものは、こと改めて「同一」であることを認知する必要もなくなるので、いつしか「零」に還元され、無化される。「同一」の反復は「無徴」へと還元され、消去される。逆

に「異なる」と認識されたものは、認識の対象になる限りで、「有徴」性を獲得する。これは「0-1」の二進法の世界では究極の「一」即ち絶対的な「有」へと無限接近する。ここに一神教の「創造主」の幻影が現れることには、追って戻りたい*33。

ここでは、「0」すなわち「無化」について、もう一言補うに止めよう。同様の「無化」は、身心技法獲得の過程でも体験される。修得した技法は表層の意識的記憶から下意識へと沈め=鎮めることで身体の末梢や内臓の自律系に根付いてゆく。自転車を乗りこなすに到るのもこの機構であるし、こちらはほぼ意識的記憶にはとどまらないが、乳幼児が二足歩行を習得するのも同様である。だがこうして身体化された下意識は、何かの拍子に再び意識へと浮上し、再帰する。そこにはフロイトが夢の形成作用として語った「圧縮」Verdichtungと「移動」Verschiebungが働く(中沢:360)。修辞学的には前者の「圧縮」作用が「隠喩」metaphor(例えば「頭」=「知性」)を育み、後者の「移動」作用が「提喩」metonymy(例えば「船先」=「舟」)の作用に類比できよう(中沢:206, 301)。いずれにせよ、一度こうしてゼロ即ち「空」に収納された「忘却」から、メビウスの帯を裏返したように、新たな意味が発生する——もはやその起源は判然とせぬものの「回帰」として。

いうまでもなく、身体運動の多くは、いちいち大脳の意識的な指令を受けるのではなく、感覚器と筋肉組織とが、すでに確立された自動化された回路で直に結びつくことで、運用される。指先に熱さや痛みを感じれば、咄嗟に指を引っ込め

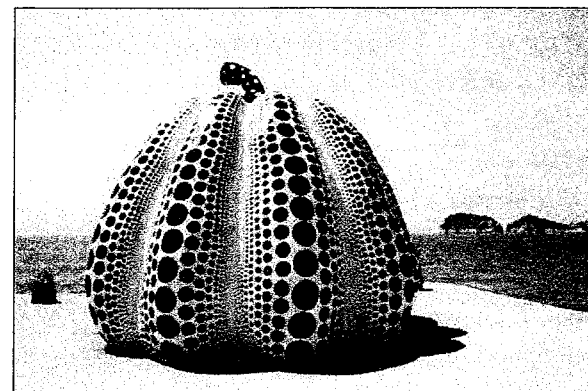
る(末梢での処理)。またひとたび乳幼児が歩き始め、子供が自転車に乗れるようになれば、その機構(小脳と海馬が司る)をいちいち大脳で分析しつつ繰り返すことはない。「それ」は意志の世界とは無縁に再来する。この「ゼロ化」・自動化の機能修得についても、後に再度、別の角度から敷衍したい。

ここまではまだ原論を確認し、幾つかの補助線を引いたにとどまる。この基本的知見を狭義の哲学の世界だけに閉じ込めておくのは、あまりに惜しい。だがこの先へと議論を進める前に、ここで一言回顧的に確認しておきたい。かつて若き日の中沢新一が『雪片曲線論』で論じたフラクタルは、同一パターンを極限まで反復しつつ、数列上の無限級数が累乗に高次の階梯へと、いわば「折り畳み」つつ進むことで、無限の反復を有限に閉じ込める術を図示してみせた。『華嚴経』の「一見荒唐無稽な数字の羅列にも、同様の嵩上げ構造が隠されていた(中沢:189; 392-396; 後述)。その具現が草間彌生の「カボチャ」の強迫的反復の様相だが、その累乗構造発見の戦慄が、『レンマ学』には、到る処に笈している。まだ「原石」段階だと自称する『レンマ学』だが、その真価が問われるのは、今からだろう。

6. 「自由」と「束縛」の彼岸へ

以上を踏まえて、『レンマ学』が開きつつある見通しから、あらためて視野に入ってくる可能性の幾つかに、試行的に触れておきたい。一方でまず「自由意志と責任」の問題圏への通路がある。小坂井敏晶『責任という虚構』は、人格の自己同一性に立脚する「責任」という社会制度を端的に「虚構」と喝破して論争を

草間彌生 《かぼちゃ》



惹起した、注目すべき論考である。その増補版の「補考」で、小坂井は國分功一郎が『中動態の世界』で提起した反論に応答している*34。だがそこで問題にされる「意志」の突き詰めにおいて、両者の議論は見事なまですれ違っている。ここで池田浩士『ボランティアとファシズム』を補助線にするならば、集団の同意の盲目性と不本意な同意との円環を巡る思索がなお余地を残していることが見えてくる*35。これは直に身心技法稽古論に接続する。甲野善紀+方条遼雨による『上達論』は、束縛と自由との螺旋について実践に基づいた稀有な考察を展開する*36。これと併読すれば、ジョッシュ・ウェイツキン『修得への情熱』の武術経験談などが、せつかくよい入り口を見つけたのに、どの段階で「中動態」的感觉を見失ったかも、如実に悟られるはずである。まず小坂井と國分との遣り取りの焦点となった、ベンジャミン・リベットの実験を見たい*37。

1. ベンジャミン・リベットの实验と、その解釈の問題。この実験は、単純に言えば、「意志的」な行為開始の0.5

秒ほどまえに脳はすでに関連する活動を始めていた、という知見*38として著名である。ここから「意志決定があつてから行為がなされる」という通念がこの実験によって覆された、とするのが通常理解。國分はここで「意志決定」や「意志」といった「言葉遣い」が不正確だと指摘する*39。これに対して小坂井は反論し、「自由意志」は社会規範が要請する虚構との立場を確認し、國分の議論は「規範論」だと反論を加える*40。だが両者の齟齬の背景には、神観念の違いであろう。小坂井にとって「神」とは社会の要請する必要悪であり、「自由意志」とは「神の擬態」に他ならない。だが國分の「神」はスピノザのそれであり、社会規範をも脱することを許す「自由」の根柢なのだから*41。小坂井の「自由意志」はいわば律法化されたデジタル記号、ロゴスの産物であり、小坂井の「責任論」批判は、畢竟このロゴス化の孕む錯誤に向けられている。対するに國分の「自由」はアナログで記号化には不適切、換言すればレンマ的な自在性を孕んだ可能態だろう。小坂井がノモス(人間の社会秩序)の水準のロゴスを批判しているのに対して、

國分はピュシス（原生的自然）の水準に定位されるテトラ・レンマの可能性を模索している。両者の「自由」はその前提からして食い違っており、それゆえ議論が噛み合わない。

2. 稽古論。さて身心技法の訓練の世界を見ても、そこでは、ともすれば前者のような（小坂井が正当にも批判する）「型」の修得が自己目的化しがちだ。だが、これを否定してアナログに徹し、それゆえレンマ的融通無碍を目指すのが、國分の注目する「中動態」で発生する事態、そして以下に触れる『上達論』の方条遼雨が稽古のなかで進める模索だろう*42。筋力をデカルト座標で時空に沿って有効に運用しようとするのが通常の「運動」だとすれば、武術の稽古は、この（ロゴス的）「運動」観の床板を踏み抜く工夫を旨とする。通常の運動競技では、競争相手に対する嫉妬や優劣感に苛まれがちだ。それは「敵」に対する敵意や嫌悪とも容易に結びつく。だが嫉妬や嫌悪に囚われると、人はかえって嫉妬や嫌悪の種を、むやみにアラ探しし始める。つまり、嫉妬や嫌悪を克服しようとしていたはずなのに、却ってその逃れたかった筈の嫉妬や嫌悪への依存症に陥ってしまう、という悪循環を招く。これは一種の自家中毒だが、武術ではこれを「居つき」と戒める。善を求める者が、自らを「善」とみなすためには「悪」を自ら捏造せねばならなくなるのと、同様の理屈である。小坂井の「責任」批判が、この機構を指弾していることは見やすい道理だろう。対するに、國分はこうした「悪」の捏造を回避する「自由」を模索する。

「自由自在」な動きを求めると、かえってその「自由自在」に囚われ、そこか

ら自由になれなくなる。だがそもそも「囚われない」ことが自由の定義あるいは実質ではなかったか。言い換えれば「自由」から解脱できるだけの「余裕」のないところに自由はない。「余裕」とは、今までの議論に沿えば、無としてのゼロ記号あるいは記号のゼロ度、「Aでも非Aでもない」という「中」のありかであり、「中論」の説くこの境地を理屈ではなく、実践のなかに探し求める歩み——そのなかに「道」が現れてくる。記号体系—主述の統辞法—という規範、慣習あるいは「癖」から脱却することの「自由」を探ることが「稽古」であり、ここまできると「稽古」を意識すること自体が「稽古」の本意からは外れることになる。逆に道場という人工環境は、社会的規範や範例から脱するための特殊な保護空間ともいえる。普段は無自覚で行っている行為や行動——お望みなら「二足歩行」や「自転車運転」——をあらためて問い直す環境に身を置くことが「稽古」だと再定義できるかもしれない*43。

ここでは、通常の道徳的常識や倫理観、「自由」を侵害するような敵対行為は「許せない」といった正義感や、自分の自由を獲得しようとする「自己実現」といった目標設定も、問い直されることになる。なぜなら、ここまできると、こうした良識や規範、目的意識は、却って心の自由を邪魔だてする障害となりかねないからだ。もとより怒りや闘争心、さらには殺意すら、競争や競技の世界では、参加者の闘争心を駆り立てるのに不可欠だと見なされ、スポーツの世界や競争社会では頻りに推奨すらされる。だがこうした意識は、修行がある段階まで来ると、競争相手に対する怯えや恐怖に劣らず、

というか怯えや恐怖と表裏一体で、かえって自滅/加害への早道となる（方条：112-117）。また不快な事態に対して徒に「我慢」してやり過ごそうとしても、それは無理強いした「抑圧」であって、相手に対する「許し」とは異質だろう（方条：120）。競争や、それに付随する序列意識は、囚われや我慢を内攻させる。そしてその限りで、優劣を競ったり、序列に囚われる意識は、武術の上達のうえでは、極めて不適切な障害となることが判明する（方条：134-135）。それなら自由とはどこに求められるのか。「何かへの自由」「何かからの自由」の対が、主意主義自由論の基本的な枠組みだった。だが以下では、不自由な状況が無化する境地に、具体的な状況倫理において発揮される類の——限定的な——「自由」を探りたい。そこに事実認定 constativeと遂行 performativeとを兼備した「中動態」のlemmaが発現するからだ。

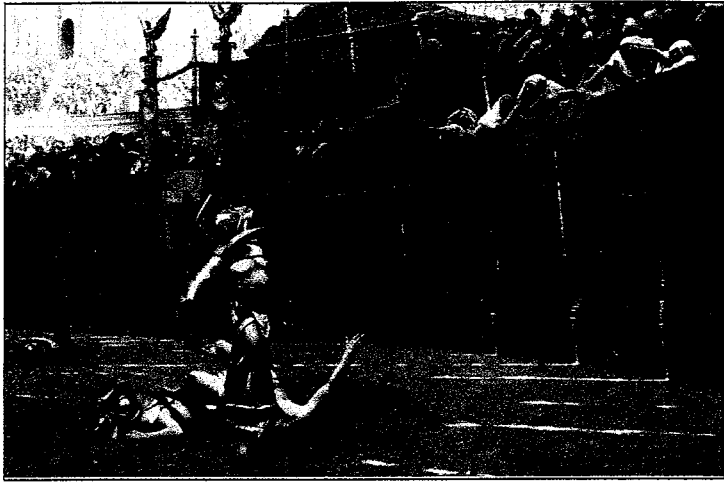
7. 心の自由と身体技法における技と

ここで武術において「技が効く」とは、いかなる状態なのかを考えよう。「技が効く」とは、抵抗しようとする相手を自在に動かせる状態ではないか。敵対する相手を思うように手玉に取ることができ、危害を加えようとする相手を無力化できるならば、それは「妙技」ともいわれよう。それは相手を破壊しようとする意図とは、必ずしも結びつかない。だが、試合形式の場合、そこでは勝敗が競われるため、どうしても相手を撃破する、という攻撃性が前面にでる。さらに「技」の効き具合は、すぐにも試合の規則に照らして有効か無効かが判定され、反則か否かで判定が分けられる。昨今の試合柔道は、

ひたすら勝敗にこだわるが、このため競技柔道の道場などでは、「負け癖」がつくからというので、受け身を教えない、という逸脱さえ起っている（方条：268）。

「柔術」元来の理念からみれば、本末転倒もはなはだしい。そもそも上手に受身が取れてなんらダメージを蒙らないなら、その投げ技は「有効」だった、といえるのだろうか。ここに試合形式の虚偽が露呈する。武術の技が殺人を目的とする技術だとするならば、その目的を達しない技など、無意味だったことになるのだから。だがルールのない格闘技は、危険すぎて競技スポーツとしては成立しない——古代ローマのコロシウムにおける奴隷の果し合いでもない限り■3。

古武道などでは、試合を行わない稽古が行われる。試合では習得できない必殺の危険な技は、型稽古で伝達するほかないからだ。とともに、相手を戦意喪失に導けばよいのであれば、なにも相手を物理的あるいは精神的に粉砕するには及ばない。だがここには、別の虚構が登場する。試合のない武術では、えてして「不本意ながら技に掛かってみせる」八百長の虚構か、あるいは「技に掛けられることに自ら無意識のまま同意する」といった意図せざる共犯関係が発生しがちとなるからだ（方条：139-140）。そしてこれは、心理学的なペテンや巧みな意識操作を利用すると、容易に集団的憑依へと伝染する。予定調和とヤラセの出来レースとは紙一重。こうなればカルト集団の成立まではあと一歩（方条：146-147）。そこでは流派の「企業秘密」が魔術的なブラック・ボックスとなり、師匠を達人と妄信する共同幻想や、自分を名人と思ひ込む妄想が、師弟関係の閉鎖空間のなかで、いつ



■3 ジャン=レオン・ジェローム 《指し降ろされた親指》1872 競走競技の結末：古代ローマ・コロッセウムにおける拳闘

しか歪な発育をとげる。こうして実質を伴わない名人技の伝説が広まるが、そこには、世代交代に伴い、実際の身体的体験などない語り手を担い手として、言葉の世界だけの理屈が付け加わる。一般的に「世の哲学・思索の多くは「身体」が伴わず」、上滑りした頭でっかちの理念の遊戯、「言語ゲーム」になってしまいがちだからである(方条:166-167)。

ここに稽古の場のむつかしさ、背理が現れる。たしかに規則に従えば安全だが、お稽古事の「安定」志向はとかく技量としては「凡庸」に陥りやすい。安定を求める環境では失敗は譴責されるが、その結果「失敗しないこと」が自己目的となる。失敗を禁じると、もはや本来の探求や、求道の向上は望めなくなる(方条:185-186)。しかしこれとは反対に、失敗を安易に許すと、自由は確保されやすくなるが、今度は安易な思いつき流されやすくなる。これは生活一般にも妥当する事柄だが、武術の稽古にあっても同様だ。失

敗が許される環境がなければ自在な思索がうまく発酵することはない。だが発酵を容易にする環境は、また容易に悪質の腐敗をも招く傾向が否めない(方条:169)。雑菌の侵入をあらかじめ選択して防ぐことはできないからだ。さきに道場、稽古の場を「失敗し放題」の許される場と呼んだが、それはこうした二律背反、利点が欠点ともなる厄介さを踏まえてのことだ。惰性の慣習を無批判に受け売りするのでなく、かといって妄想が暴走するのにも身を任せるわけでもない。

ならば稽古とは何なのか？

ここまでくると、通常、身体技法の習熟として理解されるのとは、大きく異なった世界が開けてくる。それは規則というlogicに沿って勝ち負けを決める「論理」の世界の限界を乗り越え、そうした規則の籐をはずすtetra lemma経験の場といってもよい。その彼方あるいはそれ以前の、「論理」とは異なる次元の世界への扉を開く営みのだから。そこは「肯定

でも否定でもある世界」「肯定でも否定でもない世界」を許容する、あるいはそれなくしては体験できない世界。平たく言い換えるならば、世間一般の「勝ち負け」の彼方で、身心ともに「うまく転ぶ術」を探る、いわば「負の学習」の場、「実数」に対して「虚数」の世界ともい

えようか。殺人技をうまく受身でもって躲すことができれば、競技では「負け」でも、実際には「生きる」自由を手に入れており、その限りで、「受け身」は試合での勝敗を凌駕していることになる。

(次号につづく)

【註】

- *31 小泉義之、「ドゥルーズにおける普遍教学」「ドゥルーズにおける意味と表現②③」『ドゥルーズの霊性』(河出書房新社、2019年)
- *32 多田富雄『免疫の意味論』(青土社、1993年)およびそれに基づいた、福岡伸一「免疫系では自己は空疎な欠落」『芸術と科学のあいだ』(木楽舎、2015年)。
- *33 津田一郎『心はすべて数学である』(143頁)は、自らのスキーのクロスカントリーでの体験も交えつつ、身体化された技能は、大脳を経由せず抹消で自動処理されている、と仮定する。これは、タコにおける散在神経系が、中枢をもたないにもかかわらず「合理的」とみえる行動をとる事実と、関連した考察に値する。中沢の言及する「タコのレンマ学」の世界(中沢:100-104)への連想である。ただし、津田がこれをエドモンド・フッサルの「宙づり」に直に結びつける点には、議論が分かれよう。フッサルはたしかに直観的にこうした事例を捉えていたと想定できるが、現象学的記述は、あくまで統辞文法に依拠しており、はたしてフッサルの直観を十分に記述できる道具だったかといえ、そうは言い難い。
- *34 小坂井敏晶『責任という虚構』(ちくま学芸文庫・増補版、2020年)は、原著に対する園分功一郎『中動態の世界：意思と責任の考古学』(医学書院、2017年)ほかに応答している。
- *35 池田浩士『ボランテアとファシズム』(人文書院、2019年)
- *36 甲野善紀+方条遼雨『上達論：基本を基本から検討する』『上達論』(PHP、2020年)
- *37 ジョッシュ・ウェイツキン『修得への情熱』(みすず書房、2015年)
- *38 稲賀『接触造形論』第1部第5章、註27
- *39 園分『中動態の世界』第1章註08
- *40 小坂井『増補 責任という虚構』、402-408頁。なお本書「あとがき」の註3(485-487頁)は至言である。筆者も同様の結論に至ったことを付記する。稲賀「意志的主体による責任」という「虚構の必要悪」——中動態から社会正義の根幹を問い直す、『図書新聞』3309号、2017年7月1日。
- 稲賀編『映しと移ろい』(花鳥社、2019年)第6部扉、529頁に再録。
- *41 園分功一郎『スピノザ「エチカ」：自由に生きるとは何か』(NHK出版、2018年)
- *42 アナログとデジタルを対概念とみる発想に沿って方条は議論を展開している。本論の主旨としてはそれで構うまいが、この常識そのものも、問い直される必要がある。以下参照：Shigemi Inaga, "Cultural Gap, Mental Crevice, and Creative Imagination: Vision, Analogy, and Memory in Cross-Cultural Chiasms" *Journal of Aesthetics and Phenomenology*, London: Routledge, 09 Jun 2020, Published online.
- *43 以下、本文中の()は甲野+方条『上達論』の関連箇所を指す。